



JANES Newsletter No.24-3

日本ナイル・エチオピア学会

2017年 3月 31日

1. 第22回高島賞受賞報告

受賞対象著書

大門碧『ショー・パフォーマンスが立ち上がる—現代アフリカの若者たちがむすぶ社会関係』春風社, 2015年.

講評

大門氏の上記著書について、選考委員会は2015年度の高島賞受賞にふさわしいと判断した。その理由を以下に述べる。

受賞対象著書は、2000年前後にウガンダの首都カンパラで興隆した新しいショー・パフォーマンス「カリオキ」に携わる若者の社会関係について描かれたエスノグラフィーである。カリオキとは、マイム、ダンス、コメディから構成されるエンターテイメントであり、夜間にレストランやバーなどで公演され、その鑑賞が大衆の娯楽となっている。著者である大門氏は、長期にわたる現地調査にもとづき、グループの形成からカリオキ・ショーの上演に至るまでのパフォーマーたちの社会関係を記述・分析し、多様な社会的背景を持つ人たちが短期的で柔軟に離合集散を繰り返すその特質を明らかにしている。

本書が高く評価される主な点は、以下である。

第1に、アフリカの都市における社会関係に関して、固定的な集団意識の生成を経ずにつくられる共同性の実相を詳細に描いたことにある。従来のアフリカ都市研究においては民族や集団のアイデンティティーが顕現する場としての都市が描かれてきた。そこでは、特定の言語表現、装い、儀礼やパフォーマンス、あるいは身体表現が他集団にたいして自集団の輪郭を際立たせる実践として、あるいは集団を形成させるツールとして機能する様相が分析されてきたといえる。そのような研究の流れに対して、本書では、「瞬時に集まり散っていく」ような流動性の高い若者たちの出会いの場としてカリオキ・パフォーマンスをとらえ、それを共同性が顕現する場として論じている。これは、アフリカにおける

目次

1	第22回高島賞受賞報告	15頁
2	新刊ライブラリー	18頁
3	エチオピアからの留学生紹介	19頁
4	ナイル・エチオピア地域現地・渡航情報	21頁

るポピュラー・カルチャー、さらに都市の人々の社会関係を考察する上での新たな視座を提供する試みと評価でき、アフリカ都市における社会関係や文化の創出に関する研究に新たな進展をもたらす大きな学術的貢献であるとも言える。

第2に、その斬新かつ堅実な調査方法にある。一般にアフリカの都市社会を対象とした研究を進める際には、社会関係の流動性の高さや社会の移り変わりの速さから、実証的に現象を把握することが困難であることが言われてきた。大門氏はその問題に正面から対峙し、対象者一人ひとりへのインタビューを丹念に積み重ねるとともに、自らがパフォーマーとして演じることによって、カリオキ・ショーの動的な準備・進行過程をとらえる際の視点を会得し、調査項目を緻密に組み立てることを可能とした。また、活動に深く参与しながらも自らを客観的に記述する姿勢を貫き、調査者と被調査者との関係を考慮しながら慎重にデータの収集・分析をおこなっている。調査者自身が調査対象にもなる独特的のフィールドワークと調査データの妥当性の確保を、ひとつの作品の中で見事に融合させている点は、秀逸なエスノグラフィーとして高く評価できる。

しかしながら、以下のような限界や不十分な点も指摘できる。

第1に、従来の都市文化における若者像との違いを強調するあまり、それらの併存的な状況に関する考察には至っていない。また、異なる社会的背景を持つ者たちが交わる場の醸成が、カンパラという都市に特異的にみられる現象なのかは議論の余地がある。アフリカ都市の若者が様々な種類の社会関係を使い分けながらいかに生きているのかについて、より多くの事例を集め、各都市の特殊性と組み合わせて考えることによって、さらなる研究の深まりが見られると思われる。

第2に、カリオキ・パフォーマンスに対するオーディエンスの側のリアクション、評価、解釈などの記述が決して十分とは言えない。オーディエンスの視点をより豊かに盛り込むことによって、カリオキ・パフォーマンスとカリオキをめぐる人々の動態がさらに克明に浮かび上がるのではないだろうか。第3に、ショー・パフォーマンスに関する語義規定が不十分な個所が散見される。さらに精緻な表現を記述すべきではないだろうか。

とはいっても、今後の研究の展開が大いに期待される内容であることも付け加えておきたい。

上記を総合し、選考委員会は全員一致で大門氏の著書は、アフリカ都市人類学の新しい地平を拓くエスノグラフィーであると評価し、2016年度高島賞に値すると判断した。

2016年3月10日

選考委員会
遠藤保子(委員長)
佐藤靖明
川瀬 慶



第22回高島賞受賞によせて

大門碧(京都大学／北海道大学)



ただアフリカの人たちとおしゃべりをしたいという思いが、かれらとともに舞台を踏む事態を招き、その結果として、日本ナイル・エチオピア学会第22回高島賞をいただくに至ったこと、驚くとともに、光栄に思っております。私の研究に数々の助言を与えてくださったみなさま、指導してくださった先生方に、心から感謝いたします。

2006年、佐藤靖明学会員の「今、カンパラがアツいよ」という一言に誘われ、ウガンダ共和国の首都、カンパラに降り立った私が目にしたのは、日本のカラオケを語源とした「カリオキ」と呼ばれるショー・パフォーマンスであった。夜間のレストランで音楽に合わせてダンスなどが披露されるこのショーの担い手は、10代半ばから20代半ばの若者たちが構成するグループであった。調査を始めた時点では私はかれらと同年代ではあったものの、日本で演劇活動に明け暮れていた(オタク気味の)私は、カリオキを担う若者たちという、おしゃれと音楽と恋愛を中心につきている(と思われた)かれらには圧倒されっぱなしだった。私の質問に「なんでそんなことにこたえなきやいけないのよ!」と怒鳴られたり、「え、ただそうしたかっただけ」とつぶやかれたり、かれらとの会話は簡単にはまずまず、練習や本番の舞台裏を直接観察して記録する日々が続いた。

そのうち、グループの構成メンバーが短期間で入れ替わっていくこと、本番直前につくるプログラムが本番中に次々と変化することがわかり、ショーの実施方法に変化を当然としたかれらの社会関係が反映されている、とする修士論文を執筆した。しかし、静かに観察しているだけではパフォーマーたちと距離があると感じていた私は、パフォーマーとしてカリ

オキに取り組み、自分の参加時に起こった出来事を記録することにした。

その結果、パフォーマーたちが、単に変化を常態化させ個々人が好き勝手にステージに立っているのではなく、それぞれもっているモノ(小道具や使用楽曲、振付)を使い合って、かかわりを積極的に持ちながら公演を作り上げる、「個人化と集団化の共存」という関係性がさらに具体的に浮かび上がってきた。

上述を中心に、カリオキを追いつけて耳目にしてきたことを執筆したものが、受賞対象の拙著である。しかし、課題が残る。今後の研究のために、簡単に二点あげたい。一点目は、分析結果を社会関係に終始させてしまい、パフォーマンス自体の分析に至っていない点である。先行研究では演目内容の分析が多い一方、自分の関心が公演づくりにあつたこと、また若者たちが軽いノリで即興的に立ち上げていく演目内容を分析する意義を強く感じなかつたことにより、公演過程の分析に重きを置いた。しかし今後は、このショーの大きな特徴である口パクについて考察を加えていきたい。カリオキにおいて口を含む身体の動きと音楽が完璧に同期することや、演目をパロディ化させることは強く求められていない。演者は「口パクする」ことを「歌う」と表現し、観客もまるで「口パクする」と「実際に歌う」ととの差異を重視していない。このままは、謎に包まれている。ただし演目内容のみを分析しても、この背景にたどり着くことは難しいだろう。音楽や声を含む音と身体との関係性を見極めるためには、人びとの発言とともに、やはり公演現場での演者や客と音との間に起こる交渉を観察するべきだろう。

二点目は、ステージという場に関する分析の不足である。日常会話の延長のように舞台をつくりしていく若者たちの離ればは、ウガンダにおける舞台のもつ意義と他者の視線にさらされる感覚について考えさせられる。これには、自らが演者となる「参与観察」の結果を丁寧に分析していくことが必要であろう。日本の演劇活動で身につけた私の感覚、すなわち周到な舞台準備の必要性や舞台上における緊張感も分析対象として再考することも求められる。

最後にもう一点、今後の展開に重要な視点を記したい。今回の受賞のタイミングは、私が育児に追わされて研究活動が停止気味のときであった。主に育児を担っていた私には、自分がコントロールできないものが続出していった。自分や子どもの体調、自らに課せられた社会的役割、子どもが引き出す自分の感情。これまでの調査では、私は他者と積極的にかかわり巻き込まれようとしていた。自分と他者は区別できることを前提とし、自分自身をコントロール可能であると想定して調査をしていましたように思う。しかし今や意図せず自分の生活や行動が、子どもに振り回され、自分で制御できない身体や感情に気づかずにはいられない。この自分が自分を制御できないという体験は、研究が進まないという苦しみをともなう一方で、音楽やパフォーマンスの研究に重要な視点を導く。音楽からの身体や感情への作用や、パフォーマンスづくりのさいの身体の扱いを考えるうえでは、自己のありかたは問われ続けるからだ。

ふと、松田凡学会員からの「文化人類学者は、子ども産んだらいろいろ楽しめるよ」との激励の言葉を思い出す。育児を言い訳に研究から遠のいていたが、この受賞をきっかけに、研究を深める心づもりをさせていただいたことに感謝したい。



2. 新刊 ライブラリー



新刊紹介『食と農のアフリカ史』
(石川博樹他編、2016年、昭和堂)

「アフリカ農業・食文化の歴史に挑む日本人研究者たちの挑戦」

本書はアフリカの農業と食文化を歴史的な観点でとらえようとする論文集だ。日本のアフリカ農業研究には半世紀におよぶフィールド調査を中心とした蓄積がある一方で、歴史学的な研究は他の地域と比べると少ない。その中で執筆者たちは歴史学者を交えて共同研究を行い、フィールド調査に基づく研究と歴史学的研究との融合を試みた。

3章の総説と14本の個別論考から本書は構成される。総説「アフリカの食と農を知るために」では初めの2章でアフリカ農業と食文化の全体像が示され、第3章では文字資料が比較的少ないアフリカで歴史学研究を行う際に用いる資料と手法が概説される。個別論考は第1部「環境との関わり」、第2部「食の基層を探る」、第3部「グローバリゼーションのなかで」、第4部「農村から見る」、第5部「現代社会を理解する」のいずれかにおさめられている。

個別論考の1つとして「エチオピアの雑穀テフ栽培の拡大-食文化との関わりから(第2部、藤本武氏)」を紹介したい。この論考ではエチオピア在来作物テフが近年になり栽培拡大した地域を事例としてとりあげている。藤本氏はテフ栽培の歴史研究と現地調査で得た情報を総合して、作物としての生産性だけでなく、人々の嗜好と食文化が栽培拡大に重要な役割を果たしたと論じておおり、興味深い。筆者も昨夏にエチオピアで行った野菜類の生産・流通に関するフィールド調査の中で、人々がユニークな農業・食文化を保持しつつ、外部の影響を受けながら野菜を生産していることを実感した。本書は主食作物についての記述が中心であるが、食文化とむすびついた変化という観点から、種類も調理法も多様な野菜類の論考があつても面白かったのではないかと思う。

総説から始まり、各論考に引用文献が多く示されているので初学者にも読みやすい。アフリカ農業研究を専門にされている方はもちろん、専門外の方にも入門書としておすすめしたい1冊である。

元木 航
(京都大学)



3. エチオピアからの留学生紹介: Awet Teklemichael さん



長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科に留学している Awet Teklemichael さんを紹介します。
(聞き手:同研究科所属、佐藤美穂会員、インタビュー実施日: 2017年1月13日)

Mr.Awet Teklemichael, 2nd year student, the School of Tropical Medicine and Global Health, Health Innovation Course (MSc), Nagasaki University

M.S.(Miho Sato): Please tell me your background before you came to Japan.

A.T (Awet Teklemichael) : I am originally from a town called Asebe Teferi, West Hararghe, in Oromia Region. I grew up there until I finished high school, then I studied Agriculture at Jimma University for two years. After getting my diploma, I went back to Asebe Teferi and worked for Care International for two years. I have always been interested in chemistry so I applied to the Faculty of Pharmacy at Central University in Addis and obtained my BSc in Pharmacy in 2008.

After graduation, I worked for the Pharmacy Department of the Ethio-German Development Cooperation as a pharmacist, mainly following Good Manufacturing Practice (GMP). When I was there, there were at least 20 pharmaceutical companies in Ethiopia and I was involved in GMP inspection, training, and improving the pharmaceutical marketing skills of local companies.

Around 2012, all the employees of the Ethio-German Development Cooperation were re-assigned to different governmental agencies and I found my new workplace in the Pharmaceutical Department of the Ministry of Industry. I continued the same work but I was playing the role of facilitating pharmaceutical industries to grow by identifying issues from each

company and solving them one by one. A year later, the Federal Government of Ethiopia established a new institute called the Food, Beverage, and Pharmaceutical Industry Development Institute (FBPIDI), where I worked as an Industrial Pharmaceutical Researcher. It was then that I saw the announcement of the ABE Initiative and submitted my application.

M.S.: What is the ABE initiative?

A.T: It stands for African Business Education Initiative for Youth, started in 2014. This program offers opportunities for young Africans between 22 and 39 years old to study Master's courses in Japanese universities and to experience internships at Japanese companies in order to develop skills and knowledge for contributing to the development of industries in Africa.

M.S: Why did you choose Nagasaki?

A.T: From the list of universities in Japan, Nagasaki University was one of the two universities that matched my interest.

M.S: In your batch, how many Ethiopian students came to Japan with you supported by the ABE initiative?

A.T: There were about 30. I am the only one in Nagasaki and in most places, there are at least two Ethiopians within the same city. The closest Ethiopian is in Fukuoka and Kitakyushu. I visited them and cooked Ethiopian food together.

M.S.: What was your impression of Japan before you came?

A.T: Since I was accepted to the ABE Initiative, I started watching NHK World channel on my cable TV in Addis. I was always curious how Japan has developed so much with limited natural resources and land, but now I am here and I see that Japanese people respect work and technology which led to the development.

M.S.: What was your major culture shock since you arrived in Japan?

A.T: The major culture shock for me is not having injera as Ethiopians, we are addicted to injera!

M.S.: Please describe TMGH and the Health Innovation Course to those who do not know it.

A.T: At TMGH there are three courses, the Tropical Medicine Course; the International Health Development course, and the Health Innovation course. I belong to the Health Innovation Course and will obtain a Master of Science degree at the completion of my studies.

Health Innovation literally means technologies and ideas to innovate and improve the healthcare system. Compared to other courses, students in the health innovation course has longer

エチオピアからの留学生紹介(続き): Awet Teklemichaelさん

duration for independent research and they are encouraged to continue their research projects up to doctorate level.

M.S.: Could you talk about the research project you are working on now?

A.T: The original proposal that I submitted for my ABE Initiative application was about the use of herbal medicine since, at the FBPIDI, there was an herbal medicine department but at that time it was not functional. Perhaps I was interested in herbal medicine due to my Diploma in Agriculture.

Dr. Kenji Hirayama, my advisor at TMGH, has been doing research concerning Kampo. In consultation with him, I am conducting research to examine anti-malarial activity of Kampo compound and extract under in-vitro in collaboration with Toyama University. It is my hope that the outcome of this research will be utilized for the development of prevention or treatment of malaria. As you know, the compound of the current first-line treatment for uncomplicated malaria is Artemisinin that has been made from *Artemisia annua*, a well-known herbal medicine in China for centuries.

M.S.: You have conducted your internship already. Please share where you did internship and what you have learned.

A.T: I did my internship at Ohkusa Yakuhin in Yokosuka for one week in August. I was familiar with pharmaceuticals manufacturing but it was first time for me to observe the Kampo pharmaceutical company; from raw materials, processing, tablet formulation, quality control, packaging, the entire process. Currently Ethiopia imports almost all materials from abroad but by utilizing herbs indigenous to Ethiopia there are good business opportunities for herbal medicine manufacturing in Ethiopia.

It was a good opportunity for me to visit Kamakura and see the Great Bhudda.

My internship activity can be found on the Ohkusa Yakuhin website:
<http://okusa.co.jp/topix/2016/08/mr-awet-82229.html> (In Japanese)

M.S.: What are your plans after graduation?

A.T: Before coming to Japan, I was working with Ethiopian pharmaceutical companies to identify problems and help solve them so that they could expand their business. After living in Japan, I would like to be a bridge between Japanese companies that want to be involved in the pharmaceutical sector in Ethiopia and ultimately benefit the health of Ethiopian people.

インタビュー 佐藤美穂(長崎大学/
日本ナイル・エチオピア学会会員/
ニュースレター編集委員)





難民の概況と調査許可-ウガンダおよびケニア

ウガンダ

<概況>

南スーダン、コンゴ、ソマリア、ブルンジ、ルワンダなどから難民を受け入れている。難民は、難民居住地 (Refugee Settlement) と首都カンパラで居住が認められている。現在、難民居住地は、南西部と北西部に設けられており、南西部は主に、コンゴ、ブルンジ、ソマリア、ルワンダからの難民、北西部は南スーダン、コンゴからの難民を受け入れている。2016年7月以降、南スーダンにおけるウガンダ国境との隣接地域での治安悪化により、北西部では南スーダン難民が急増している。2016年8月にウンベ県、2016年12月にモヨ県にそれぞれ新しい難民居住地が設けられた。変化が大きいため、隨時、新しい情報を入手することが望ましい。

*参考

RMMS (Regional Mix Migration Secretariat: Horn of Africa and Yemen) >Country Profiles>Uganda (<http://www.regionalmms.org/index.php/country-profiles/uganda>)

South Sudan Situation: Information sharing portal (<http://data.unhcr.org/SouthSudan/country.php?id=229>)

<調査許可>

難民居住地の調査では、ウガンダ政府の難民担当部局である首相府 (Office of the Prime Minister: OPM) 難民局 (Department of Refugees : DoR) からの調査許可が必要となる。

カンパラの事務所で、調査期間、調査地、調査目的、申請者の連絡先等を記した申請書を提出する。初調査の際に

は、ウガンダ科学技術評議会 (Uganda National Council of Science and Technology: UNCST) から取得した調査許可の提示を求められることがある。難民居住地到着時に、OPM からの調査許可を、難民事務官 (Refugee Desk Officer : RDO) もしくは居住地指揮官 (Settlement Commandant) に提出する。OPM からの調査許可があれば UNHCR からの調査許可はとくに求められない。

*参考

OPM, Kampala (<http://opm.go.ug/>)

ケニア

<概況>

ソマリア、南スーダン、エチオピア、コンゴ、スーダン、ブルンジなどから難民を受け入れている。難民は、難民キャンプ (Refugee Camp) と首都ナイロビで居住が認められている。難民キャンプは、北東部のダダーブと北西部のカクマに設けられているが、2016年に政府がダダーブ閉鎖を発表しており、今後はカクマのみとなる可能性が高い。2014年以降、カクマでは難民キャンプの増設が進んでいる。

*参考

RMMS (Regional Mix Migration Secretariat: Horn of Africa and Yemen) >Country Profiles>Kenya (<http://www.regionalmms.org/index.php/country-profiles/kenya>)

<調査許可>

現在、ダダーブ難民キャンプは日本人の立ち入りが禁止されており、カクマ難民キャンプのみ調査が可能である。

難民キャンプの調査では、UNHCR とケニア政府の難民担当部局である内務・調整省 (Ministry of Interior & Coordination) 難民問題事務局 (Refugee Affairs Secretariat: RAS) からの調査許可が必要となる。初調査の際には、RAS から国家科学技術革新委員会 (National Commission for Science, Technology and Innovation: NACOSTI) から取得した調査許可の提出を求められることがある。なお、短期の調査であれば、カクマに事務所を置く国際 NGO、日本難民を助ける会 (AAR Japan) を通してカクマの UNHCR と RAS に直接、申請書を提出することもできる。UNHCR に申請書を提出すると、数日後に調査許可が送付される。RAS からは調査許可を示すスタンプが押された申請書のコピーが送付されるため、カクマ到着時にコピーを RAS のオフィスに提示し、オリジナルを入手する。

*参考

UNHCR, Kakuma (<http://www.unhcr.org/ke/479-kakuma-refugee-camp.html>)

(村橋勲、大阪大学/
日本ナイル・エチオピア学会会員/
ニュースレター編集委員)



編集後記

今年度最後のニュースレターを無事に配信することができひとまず安心しています。今年度から、できるだけ最新の現地情報を頻繁に会員のみなさんにお届けすることをめざして一年間に3回配信してきました。この一年間の反省点をふまえて、来年度も配信をつづけていきたいとかんがえております。忌憚のないご意見などどうぞよろしくお願ひいたします。

第26回学術大会が、2017年4月15-16日にかけて富山大学で開催されます。4月15日の公開シンポジウムは、「アフリカと日本の無形文化遺産—保護・継承・発展にむけて」というテーマで開催されます。メケレ大学からウォルバート・シュミット博士をお迎えするほか、研究者以外にも、ユネスコや文化庁などさまざまな立場で無形文化財にたずさわる方からのお話をうかがえます。ぜひみなさんご参加ください。

一年間ニュースレターを購読していただきありがとうございました。来年度もよろしくお願ひいたします。(MK)



- 15 頁写真：多様な品種のモロコシ（於南スーダン、2013年1月撮影、撮影者：村橋勲）
- 17 頁写真：高島賞授賞式（大門碧会員（左）・重田眞義学会長（右）、於高島市、2016年4月撮影、撮影者：村橋勲）
- 18 頁：キャベツ畑の様子（於エチオピア、2016年8月撮影、撮影者：元木航）
- 19 頁写真：Awet Teklemichaelさん（左）・長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科（右）（於長崎、2017年撮影、撮影者：佐藤美穂）
- 20 頁写真：Awet Teklemichaelさんが講義を受講する様子（於長崎、2017年撮影、撮影者：佐藤美穂）
- 21 頁写真上：幹線道路を走るガリ（於エチオピア、2014年撮影、撮影者：金子守恵）
- 21 頁写真下：アルバート・ナイルを渡る（於ウガンダ、2016年8月撮影、撮影者：村橋勲）
- 22 頁写真：オオムギ収穫（於エチオピア南西部、2014年撮影、撮影者：金子守恵）

JANES ニュースレター No.24-3

2017年 3月 31日配信

編集・配信：日本ナイル・エチオピア学会

編集委員：金子守恵、佐藤靖明

佐藤美穂、村橋勲